

「わかる」をわかると 授業がかわる

大分大学教育学部
藤田 敦(教育心理学)
a-fujita@oita-u.ac.jp

大分大学教育学部で、教職課程の教育心理学を担当している藤田敦と申します。例年でしたら教育支援センターの研修室で、みなさんと直にことばを交わしながらの講座なのですが、このような状況ですので 資料配布という形式で代替させていただきます。

この講座では、生徒たちはどのような「わかる」を授業中に体験するのか、また、教師は生徒にどのような「わかる」を求めて授業をしているのかについて考えたいと思います。

さて、みなさんは、授業者として、生徒の興味関心をひき、学習意欲を高めるような「おもしろい授業」を実践したいとは思いませんか。芸人のように言葉巧みに生徒を笑わせて授業にひきつけるスキルがあればいいのですが、それは簡単なことではありません。

でも、笑いに頼らなくても(笑いでごまかさなくても)、「おもしろい授業」をつくることはできます。



この図を見てください。ここには意味がある「何か」が描かれています。それを見つけ出すことはできますか？

おそらく「なんだこれ？」という感じだと思いますが、我慢して「何か」を探してください。

探すのをあきらめてしまった方は、この資料の最後のスライドを見て、再びここに戻ってきてください。

どうでしょうか。今度は、「何か」がはっきりと見えるでしょう。「へえ～」「なあんだ、そういうことかあ」とつぶやいていませんか。これが、「おもしろい」と脳が感じている瞬間です。

おもしろい【面白い】

「面(おもて)が白くなる」
目の前がぱっと明るくなる感じ



わからなかったことが「わかる」こと



面白い授業＝「わかる」瞬間を
実感できる授業

「おもしろい」を漢字で書くと「面白い」になります。「面」が白いと書きますが、これは顔が青白いという意味ではありません。

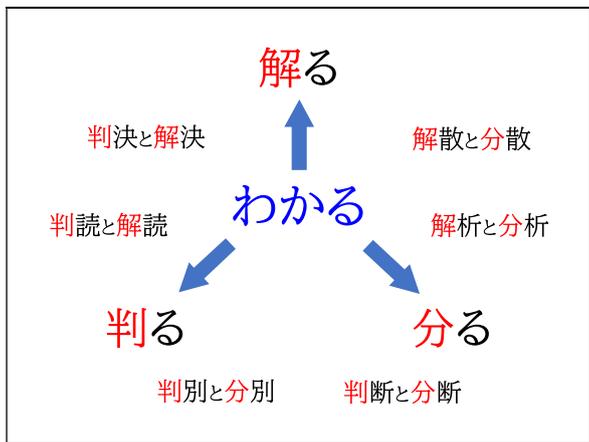
「面」は「おもて」と読みますが、これは「表」と同じく、「表面」「外の世界」「前面に拡がる世界」という意味です。つまり、ぼんやりしていた目の前の世界が、はっきりと鮮明に見えてきた状態を「面白い」というのです。

「面白い」とは、わからなかったことが、わかるようになることです。なので、面白い授業とは、「わかる」瞬間を体験できる授業ということになります。

余談ですが、「面」には、人間の表に見えている部分である「顔」という意味があります。逆に、人間の見えていない部分は「心」です。なので、「こころ」には「裏」という意味もあります。

「うらやむ(羨む)」という言葉がありますが、元は「心(うら)病む」と書いていたそうです。つまり、他人をうらやむ人は、心が病んでいるということです。

どうですか？知らなかったことが「わかる」と「面白い」でしょう。



「わかる」はこのように3つの漢字で書き分けることができます。この「判る」「解る」「分る」の3つの「わかる」の意味は同じだと思いますか。

「判」「解」「分」のそれぞれに、同じ漢字をつなげた熟語のペアを並べてみました。例えば、もし「解」と「分」の意味が同じならば、それぞれに「散」をつなげた「解散」と「分散」は同じ意味になるでしょう。

ところが、二つの意味は異なります。

「衆議院を解散」だと、議員は地方の選挙活動にもどって、中にはもう戻ってこない議員もいそうです。

「衆議院を分散」だと、各委員会に分かれて議論した後、また、本会議場に戻ってくるイメージですね。

他の熟語のペアも同じく、意味は同じではありません。ということは、「る」と送り仮名をつなげれば、どれも「わかる」読めるけれど、「判る」「解る」「分る」の意味は、少し違うかもしれないと予想できます。

確かめてみましょう。

【わかる】の意味を用例から考えると・・・

【判る】	【解る】	【分る】
どちらがオスかメスか 判る 。 どの公式を使えばよいか 判る 。 めしべがどこにあるか 判る 。	血液が循環する仕組みが 解る 。 この公式で計算できる理由が 解る 。 化学反応の一連の過程が 解る 。	主人公のさびしい気持ちが 分る 。 クラスでの私の役割が 分る 。 当時の農民の苦しさが 分る 。
適切な選択肢はどれか 判別 できる。 どの解き方がよいか 判断 できる。	原因と結果の関係を 解明 できる。 なぜ、こうなるのか 解説 できる。	思いや考えを 分かち合う ことができる。 義務、役割などを 分担 できる。
正否・善悪・相違を 判別 できる。	内容・仕組・関係を 解明 できる。	意義・価値・考えを 共有 できる。

言葉の微妙な意味の違いは、どんな使い方をするのかを調べてみるとわかります。

「判る」「解る」「分る」の用例を比較すると、それぞれが表している「わかる」の意味の違いを感じ取ることができませんか。

*現代の国語表記では、すべての用例で「分る(一般には“分かる”）」を使うことができます。ただし、ここでは、あえて「分る」だけが持っている特有な意味に注目するため、他とは区別して整理してみました。

【判る】は、どれが正しくてどれが間違っているのか、より適切な答えは何かを識別したり、判別したりする際に使います。

【解る】は、どのような因果関係や仕組みによって そうなるのか(それが正しい答えとなるのか)を、理解したり、解釈したりする際に使います。

【分る】は、ある考えや思い、決まりなどを、お互いに分かち合い、分担するという意味で使います。

でも、このような意味の「分る」は、普段はあまり意識することのないタイプなので説明を加えます。

【分る】 **分かち合う**学びの価値

世の中の決まりごとは、自分だけが知っているても、何の価値もない。みんながわかっているからこそ、決まりごとの意味が生まれる。

学校で学ぶ知識も、自分だけが知っているても意味はない。みんながその知識の価値を認めてこそ、その知識を学ぶ意味が生まれる。

だから、学びは分かち合う必要がある。
(分かち合う)

「交通ルール」は、自分だけが知っているても、まったく役に立ちません。すべてのドライバーや歩行者が「交通ルール」を学び、それを守ることで始めて役に立つルール、意味のあるルールになります。

学校で学ぶことも同じです。難しい数学の問題の解き方も、その解き方が正しいことを皆が知っているからこそ、その解き方で問題を解けることを、周りから「すごい」と認めてもらえるのです。

世の中のルールや考え方も、学校で学ぶ知識も、他者と共有して始めて、その意味や価値が生まれてきます。「分る」とは、ある考えを「分かち合う」「分かり合う」ことで、自分たちが学んだことの価値を高めていく作業なのかもしれません。

ところで、学校で学びを分かち合う体験には、もう一つ意味があります。

たくさん見ず知らずの赤の他人が車で走り回っている道路の中に、みなさんは平気で安心して入っていくことができます。それは、私たちが、「みんな交通ルールやマナーを守る大切さを知っているはずだ」と信じているからです。

道路に限らず、私たちは、自分とはまったく異なる価値観や習慣を持ち、まったく知らないことばを話している人たちの中には怖くて入っていきません。

学校という同じ場所で、同じ時代に一緒に学び、同じことを正しいとか美しいとか認めている人たちがこの世の中にはたくさんいると思えるから、大人になったときに安心して社会に踏み出すことができます。

知識を身に付けるだけなら、オンライン教材でも参考書で独学でも十分ですが、学校でみんなと一緒に学ぶという体験は、教科書の知識以上の大切な学びをもたらしてくれます。それは、人に対する、社会に対する、将来に対する信頼感や安心感です。今盛んに「学び合い」が薦められるのも、このような意味があるからかもしれません。

どうすれば【わかる】のだろう？		
【判る】	【解る】	【分る】
どちらがオスかメスか 判る 。	血液が循環する仕組みが 解る 。	主人公のさびしい気持ちが 分る 。
オスあるいはメスと判定するための条件や基準を区別して 記憶 する。	なぜ、血液が循環するのかという問いを立て、人体の仕組みを 理解 する。	主人公の立場で感じたことを、他の学習者(教授者)と 確認 し合う。
正否・善悪・相違を区別するための、決まりや基準を整理して憶える。	内容・仕組・関係を予想するために、なぜそうなのかと問い、理由を求める。	意義・価値・考えを共有するために、皆が認める考えなのかどうかを確かめる。
暗記、問題練習	発見、仮説検証	話し合い、学び合い

では、どのような学習経験を経て、それぞれの「わかる」に到達できるのでしょうか？

【判る】ためには、どれが正しい答えなのかを判別できるように、判断基準やルールを憶えなければいけません。また、どの問題にはどの解き方が良いかを選択できるように、問題と適切な解法の組み合わせを憶えておくことも必要です。そのためには、練習問題を繰り返したり、暗記学習で記憶を確かにしたりとなります。

このように考えると、「判る」ための学習は、受動的・機械的な学習になりがちで特に面白くはなさそうです。学習を面白くするためにも、記憶に定着しやすくするためにも、次の「解る」学習が欠かせません。

【解る】ためには、なぜそれが正しい答えと言えるのか、なぜその解き方で良いのか、その理由を理解するための学習が中心となります。「なぜ、そうなるのか」という問いを立てて、能動的・主体的に理由や答えを探していく学習です。自分の予想の正否を検証して、「なるほど、そういうことか」と新たな発見や気づきに至る授業です。

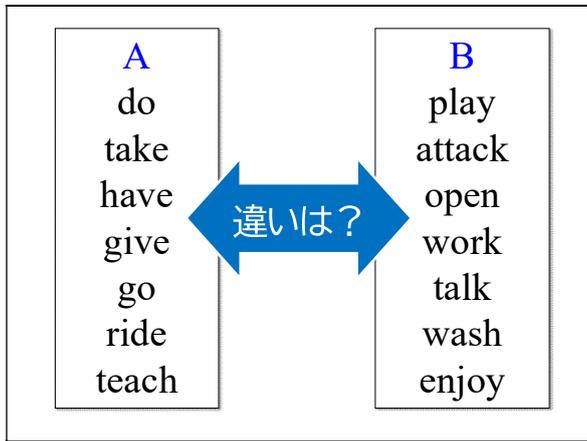
もし、理由を、最初から教師が解説してしまったら、「Aの理由はBである」ことを憶えただけの【判る】学習にとどまってしまう。あくまで大切なことは、「わからない」問題を、自らの力で「わかる」ようになっていく経験です。

【分る】ためには、ある考え方や問題の解き方、発見した答えを、生徒同士で、あるいは教師との間でお互いに認め合っていくことが必要になります。

物語の主人公の気持ちなどは、読み手によっていかようにでも解釈できます。ひとりよがりな解釈も可能だけれど、社会的に認められなければ価値がありません(テストでは0点になります)。

数学の文章題を解いていると、途中の解き方は違うけれど、たまたま答えは合っていたということがあります。でもそれでは、記述式の入試だったら点数はもらえません。むしろ、答えは違うけれど途中の考え方は理にかなっている場合の方がたくさん部分点をもらえます。つまり、数学で求められるのは、他者を納得させられるような論理的・合理的な考え方ができることです。

そこで、重要なことは、話し合いや学び合いという活動のなかで、他者に説明したり、議論を通して共通理解にたどり着く経験です。



Aの単語とBの単語の違いは何でしょう？

Aは不規則動詞，Bは規則動詞です。

みなさんは、ここに何か疑問を感じることはありますか？

中学生のころの私はちょっとひねくれていたので、英語の先生にこんな質問をしました。

「ぜんぶ規則動詞だったら間違いがなくていいのに、なんでわざわざ不規則動詞なんてめんどうなものがあるの。受験生を困らせるため？」

先生は困った顔で、「英語は、昔からそういうものなんだから、あきらめて覚えなさい」と一言。私はこのとき、英語を「あきらめた」気がします。英語という言葉の決まりごとに対して、深入りせず意味や理由を求めることもなく、ただ、教師が言うこと、教科書に書いてあることを鵜呑みにするだけのたいくつな学習という認識のままで中学、高校を過ごしました。

ところが、大学で受けた「英語学」の講義が、その認識を崩してくれました。

A do take have give go ride teach		B play attack open work talk wash enjoy
---	--	---

【判る】
Aは不規則動詞，Bは規則動詞である。また，規則動詞は，語尾にedをつければ過去・過去分詞になる。

【解る】
昔はすべての動詞が不規則動詞だった。しかし，英語に限らず言語には単純化していく傾向があり，規則動詞が生まれた。ただ，よく使っていた動詞は，変えるとかえって混乱するので不規則のまま残った。

【分る】
発音も大きく変化する不規則動詞は聴覚でも識別が容易である。会話中に頻出する動詞は，不規則の方が聞き分けやすい。言葉の決まりは，コミュニケーションがスムーズになるように作られている。

中学，高校での学習は【判る】のレベルにとどまっていたと言えます。どれが不規則動詞か，どのように変化するかをひたすら暗記する学習です。

ところが，大学の講義は，不規則動詞を深く「わかる」学習になりました。

「不規則動詞は，どれも日常的によく使う単語ばかり」

「耳で聞いてははっきりと現在か過去か聞き分けられるのは不規則動詞」

言語の成りたちの歴史と，文法にも規則にも，すべてちゃんとした理由があることを知りました。しかも，それらはいずれも，人がコミュニケーションをする際に誤解や聞き間違いをできるだけ防ぐためにあるものでした。不規則動詞の存在価値を，言葉を生み出して後世に伝えてきた人たちと「分かち合う」ような学びでした。

決して，受験生を困らせるためではなかったのですね。

英語が「面白い」と，初めて感じた講義だったのです。(なお，言語の成り立ちには諸説あるそうです。)

練習問題

☆千円札が【判る】【解る】【分る】とは？

☆円の面積 = πr^2 が【判る】【解る】【分る】とは？

☆有名絵画が【判る】【解る】【分る】とは？

☆ () が【判る】【解る】【分る】とは？
↑
自分の担当教科(単元)を入れて考えてください

3つの「わかる」の違いは，なんとなくわかってきたでしょうか？

では，練習問題に挑戦してみましょう。解答例をあげていますが，すぐに見るのではなく，一旦，ほんの数分で良いので自分で考えてみてください。

また，自分の担当教科，もしくは個々の単元について，「わかる」とはどういうことかも考えてください。

「化学を判るとは」「古文を解るとは」「太宰治を分るとは」

「複素数を判るとは」「モーツァルトを分るとは」……

★千円札が判る

これは日本の紙幣で、老万円札ではなく、千円札だ。どれが真札で、どれが偽札か見分けがつく。描いてある肖像は野口英世だ。

★千円札が解る

隅に凹凸があることで視覚障害者が他の紙幣と識別できる。磁気を帯びた特殊なインクが使われており、機械で偽札と区別できるようになっている。

★千円札が分る

千円札に対して抱えている価値の大きさを感じている。何が買えるか、どのくらい働けばもらえるか想像できる。

千円札が「わかる」ってどういうこと？

千円札が「わかる」と何ができるようになるの？

こんなことを考えるのは、生後初めての体験ではないですか。

「真札と偽札を見分ける」などは、本物のプロの判り方でしょうね。一枚のお札をまじまじと見ることなど普段はないので、この機会にぜひ観察してみてください。おそろしいまでに高度で繊細な技術が、ふんだんにちりばめられています。これは、デザイン的な理由ではなく、偽造を防ぐという理由が大きいですね。みんなが安心して信頼できる紙幣にするための日本の誇るべき技術です。

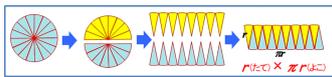
ところで、みなさんの周りには、千円札に対して感じている価値の大きさが、同程度の人ばかり集まっていませんか。「千円札なんてはした金」なんて言ってる価値観が異なる人とは、なんか付き合いつらいですね。

★ πr^2 が判る

どんな図形の面積を求めるときに使える公式か判断できる。 π に円周率、 r に半径の長さをあてはめることができる。この公式を使って円の面積を計算することができる。

★ πr^2 が解る

円を三角形に分解して組み合わせ、長方形に変換して面積を求めるとこの公式なることを説明できる。



★ πr^2 が分る

「三角形に分解すると求積できる」という考え方は、円も多角形も、すべての図形の求積に使える便利なことを知っている。

円の面積を求める問題を出すと、ほとんどの大学生は計算できません。でも、なぜ、この公式で求められるのか説明できる学生は一握りです。

つまり、「判る」けれど「解らない」レベルです。

すべての学生は小学生の時、円を切ったり貼ったりしながら公式を求める学習を体験しています。そのときの授業では、公式の成り立ちを一度は解ったと思います。でも、それ以降の授業では、公式を使って面積を計算するばかりなので忘れてしまうのでしょう。

さらに、多くの大学生はひとつの図形にひとつの公式を1対1で対応付けて憶えていました。平行四辺形も台形も、三角形に分解したり長方形に変換して面積を求めますが、その考え方がすべての図形の求積法として共通しているという認識はありません。共通の原理さえ知っておけば、たとえ個々の公式を忘れても(あるいは初めて見る形でも)、自分で求積の計算式を作れることを「分って」いませんでした。

ところで、誰だったか思い出せないのですが、ある数学者がこう言っています。小学校から高校まで、三角形の性質とか面積とか三平方の定理だとか、三角形の合同や相似とかサインコサインだとか、なんでこんなにも三角形にまつわることを何度も何度も勉強するのでしょうか？

それは、この世に存在するすべての図形は三角形に分解できるからだそうです。つまり、三角形のことを知っていると、すべての図形の性質を理解できるのだそうです。

三角形を何度も学ぶことの価値が「分る」と「面白い」です。

★「落穂拾い」が判る

『晩鐘』ではなく『落穂拾い』だと識別できる。
仏のミレーによる1857年に描かれた油彩画であると述べるができる。



★「落穂拾い」が解る

手前の貧しい農婦の暗い色調と、奥の裕福な農家の明るい色調を対比させることで、両者の違いを際立たせるという技法について説明できる。

★「落穂拾い」が分る

(優れた技術で描かれることで)
貧しい農民たちの生活の重苦しさを感ずることができる。
権力に抗おうとする作者の意図を読み取ることができる。

「開運！なんでも鑑定団」を見ていると思うことがあります。
「残念ですねえ、本物なら2千万は下らないけど、これはがんばって2千円というところでしょう。でも優しいおじいさまの形見ですから大事になさってください。」

ここには異なる2つの価値観が存在します。

作品の値段(市場価格)を算定する基準は、多くの専門家が話し合っって学び合っって作り出し、お互いに「分かち合っった」価値観です。本当の作者は誰か、作者の技術を世界ほどの程度認めているか、その技術はどのくらい高度で希少なのか…

作品の真贋を「判る」こと、使われている技術を「解る」こと、真贋や技術を測る基準を「分る」ことで、社会的な価値を算定できるようになります。

一方、持ち主にとっての価値は、作品との思い出とか、その作品から感じる事とか、その人だけが持っている物差しで測るものです。この物差しで測った価値を他者と共有するのは難しいでしょう。

芸術は、社会と共有できる価値観を通して「わかる」こともできるし、自分だけの価値観で楽しむこともできます(この場合は「わかる」よりも「楽しむ」ですかね)。



今までの自分の授業は、生徒にどの「わかる」を求めていましたか？

さて、これまでの自分の授業は、どのような「わかる」を生徒に求めてきましたか。「判」「解」「分」のいずれかに偏ったり、不足したりしていませんか。

特に、受験を意識した授業では、正解は何か、適切な解き方はどれかを「判る」学習が中心になるかと思います。中には、普段から「解る」や「分る」を省略して、正しい答えや解き方だけを一方的に伝える授業をしていたかもしれません。

しかし、生徒の人生は、受験の後も延々と続いていきます。

答えを自分で解明したり、学ぶことの価値を知って学び続けられる人になるためには、「解る」や「分る」体験が必要です。「授業に面白さなど必要ない」と言い切る教師は、生徒を深い学びに導くことはできないように思います。

教師1年目のみなさんの中には、日々の授業を消化するので精一杯な人もいるかもしれません。まずは、自分自身が、担当する教科について、徐々に「解っていく」面白さや、他者と「分かち合いたくなる」価値を発見してみてもいいでしょうか。

判 解 分 生徒がわかる

生徒理解にあてはめると？

自分の生徒理解はどのタイプ？

ところで、教師自身が生徒理解をするとき、つまり生徒のことを「わかる」ときにも3つのわかり方があります。

あなたの生徒理解は、「判」「解」「分」のどのタイプでしょうか。

★生徒を判る

この子は、落ち着きのない生徒です。
このタイプの子は、練習を繰り返す指導が必要だ。
この生徒は数学の成績がよいので理系に進学すべきだ。

★生徒を解る

この生徒の計算ミスが多いのは認知的な障害が原因かもしれない。
学業に自信を持つことができれば、人に対しても積極的になれるんじゃないだろうか。

★生徒を分る

あなたは親を悲しませたくない思いで、一生懸命我慢しながら生きてるのですね。
こんな失敗したら登校したくないという気持ちになるよね。

生徒を「判ろう」とする人は、批評家タイプです。

この子はこういう子だとレッテルを貼ることで判った気になります。一面的な生徒理解にとどまってしまい、経験則や思い込みで指導してしまいがちです。指導の仕方に柔軟性がなく、結果的に生徒の可能性を引き出せなくなるかもしれません。

生徒を「解ろう」とする人は、研究者タイプです。

見えない原因を探りだして、生徒の現状を見事に解釈・説明することができます。原因を取り除けば現状を変えられると考え、

うまくいけば問題を解決することもできます。

ただ、教師の力ではどうにもならないような原因に、いつまでもとらわれて、一向に事態が改善しないこともあります。たとえば、家庭の経済状態が原因だった場合、教師には何もできませんね。

生徒を「分ろう」とする人は、カウンセラータイプです。

生徒の現状をただひたすら受け容れ、一緒に思いを分かち合います。

一見何の解決にもならないようにも思えます。

実は、カウンセラーは、直面している問題に立ち向かい、それを解決するのは生徒自身の力だと考えています。カウンセラーが寄り添って頑張ってる姿を認めてくれるだけで、生徒は安心して、自分の力で問題に立ち向かおうとする勇気をもらいます。

いかがでしょうか。

3つの「わかる」を通して考えると、教師としての自分の授業観や人間観を見直すきっかけにもなるかと思います。

「布が破れたので、
干草の山が重要だった。」

どんな状況をイメージしますか？

さて、この文章を読んで、どんな状況をイメージしますか？映像を思い浮かべてみてください。

教員の研修会などで尋ねると、「干し草のベッドを覆っていたシーツが破れて、からだか床に落ちそうになったけれど、干し草があったので助かったアルプスの少女ハイジ」という回答が返ってきます。ああ、確かにと思った方は、少々年齢が……

この文章自体には、難しい単語が含まれているわけでもなく、複雑な構文があるわけでもありません。実に単純な文章ですが、何を言いたいのか、なんとなくぼんやりしています。

では、この文章をはっきりと「わかる」ためのヒントです。次のスライドの解説の10行目の文末を見てください。

どうですか。ひとつひとつの単語の具体的なイメージや全体の状況が鮮明に見えて、はっきりとわかったと思います。最初のダンスの絵の時のように、「ああなるほど」と思ったのではないのでしょうか。

さて、このような「なるほど体験」を味わうためには、一度「なんだかわからないなあ」という段階を踏んでおく必要があります。最初からヒントを提示しておいたら何一つ面白くないことでしょう。つまり、「わかる」という瞬間を面白いと感じるためには、「わからない」ということを一度自覚しておく必要があるということです。

「学び」で大切なことはわかった結果ではなく、「わからない」が「わかる」に変わっていく経験

判る 解る 分る

刀

わかる = 別れる
わからない = 別れない

ところで、みなさんは気づいていたでしょうか。

3つの「わかる」の漢字の中には、いずれも「刀」が隠れています。（判のつくりは、りっとう(立刀)です）

半分に切ったり(判)、牛を切り分けたり(解)、真っ二つに割る(分)のために使う「刀」が字の中に含まれていました。

元々、「わかる」とは、刀で切ってスパッと割れる様を表す言葉で、別れると同じ意味を持っていたようです。そのため、何かをわかると、その何かとはきっぱり別れてしまうのです(???)。

「あなたのことはわかりました」と奥さんが言ったら、もうその夫婦は別れてしまいそうな気がしませんか。離婚しないまでも、ふたりの会話は終わるでしょうね。【パラシュート】

まだ、相手の中に「わからない」部分が残っていると、それを知るためにかかわり続けようとしています。でも、ひとたびすべてをわかってしまうと、それ以上の関係は途絶えます。

学びも同じで、わからないことがあるからこそ、わかりたいという思いが芽生えます。すべてをわかってしまうと、そこで学びは終了です。

でも、多くの場合、何かが「わかる」と、次の「わからない」が見えてくるので学び続けることができます。

「わからない」は学びの原動力なのです。

第1節 式の計算

A 単項式と多項式

2, x , $3a^2$, $(-5)x^2y$ のように、数や文字およびそれらを掛け合わせてできる式を単項式という。単項式において、数の部分をその単項式の係数といい、掛け合わせた文字の個数をその単項式の次数という。

2, -5 など、数だけの単項式の次数は0とする。ただし、数0の次数は考えない。

普通、 $1x$ は x と書き、 $(-5)x^2y$ は $-5x^2y$ と書く。

数学が苦手だったという大学生が、高校の頃こんなことを考えていたと教えてくれました。

これは、高校の数学 I の教科書の最初の単元の冒頭部分です。すさまじいまでの紋切型で、一切の疑問をはさむことを許さない、威圧的な文章だと思いませんか。

一言のあいさつもなく、いきなり登場する数字とアルファベット、なんの断りもなく勝手に定められている「～を～という」という決まり事の数々、

「なんで、数0の次数は考えないのか？」などと思ってしまう自分はどこがおかしいのだろうか？

これは「普通」のことなのか、自分は「普通」のことすらわからないのか？

教科書も先生も、数学が得意な友だちも、みんなあたりまえのように「わかりきったことでしょ」という前提で話を進めていきます。数学が苦手な私には、このあたりまえの世界に足を踏み入れることが、そもそもできないのです。

おそらく、この学生の「わからない」は、まったくほったらかしで授業は進んでいったのでしょね。私が教えている大学は、文系が多いので、この話を聞いていた他の学生も、うんうんとうなずいていました。

この学生は、「わからない」子の気持ちがわかるような小学校の先生を目指したいと言っています。ひとりひとりの「わからない」をおろそかせず、「わかる」瞬間を実感できる授業をぜひ実現してほしいと願っています。



今回の資料の最初から、この輪郭つきのイラストを見ていたらなんの驚きも感じなかったことでしょう。

まず、輪郭なしのイラストを見て、「これ、なんだ？わからないなあ」と頭をひねったからこそ、踊り子が見えたときに面白いと思ったのです。

あまりにもわかりやすい授業、最初から答えを言ってしまう授業、一通り解き方の説明をしてあとは問題練習ばかりさせる授業、「これ大事だからノートに写して憶えなさい」と言ってひたすら板書だけする授業……

どれもこれも実に面白くなさそうです。生徒が素直で真面目ならテストの点数はとれるようになるかもしれませんが、学びの魅力も知らないままの大人になってしまうかもしれませんね。

みなさんは、受験を言い訳に妥協することなく、どこまでも面白くて「わかる」授業を追及してみてください。

ちなみに、私たちの脳は「面白い」と感じた瞬間に分泌されるドーパミンによって快感を感じるそうです。その快感が忘れられなくて、脳はふたたび「面白い」を求めます。脳が中毒になるくらい「そうか、わかったあ」と感じるような授業を年に1回くらいしてみませんか。